

屯田兵も活躍した

札幌競馬事始め

古来、日本では神事であつた競馬も、幕末以後、外国の影響から、次第に娯楽として受け入れられ、明治時代になると札幌でも盛んに行われました。今回は、そんな札幌の競馬草創期の様子を紹介します。

明治四年（一八七一年）、札幌神社（現在の北海道神宮）が円山に造られると、その祭礼には、開拓使の奨励もあつて、多くの人が仕事を休んで出掛けました。札幌での競馬事始めは、その祭礼に集まつた近郊の農民が、余興として行つた馬比べの競走だと伝えられています。

場所は、南一条から北五条までの西二五丁目通で、距離約五百五十^{メートル}の直線コースでした。六年（一八七三年）には、札幌本庁主任となつた松本十^{まつもとじゅうじゅう}郎大判官が、自ら愛馬を駆つて、大通で競馬を開くようになりしました。庶民に交じつて手綱を握る開拓使高官の姿は大変な評判で、それを伝え聞いて岩内や江差

方面からも参加者が集まつたそうです。

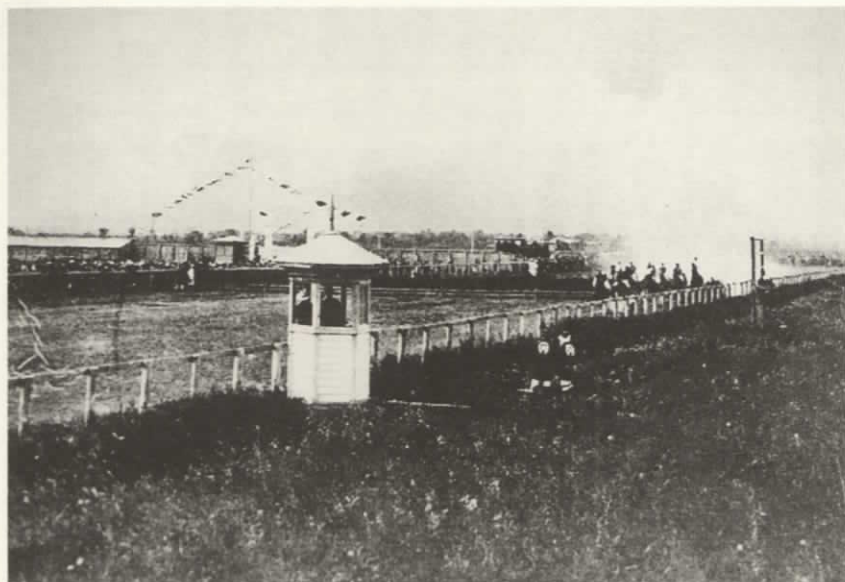
当時は、馬場が整備されおらず、速さを競い合うよりも、ダグとかアイビと呼ばれる速歩が中心で、立ち乗りや騎乗したまま地上に置いた物を拾う曲芸のようなものでありました。

十年（一八七七年）になると、現在の北大構内に距離約八百^{メートル}のだ円形の競馬場が登場。翌十一年（一八七八年）からは、いよいよ本格的な疾走による競馬がお目見えします。

しかし、現在のように一度に何頭もの馬が走るのではなく、赤と白の二頭立てで、太鼓の音でスタートを切るといふ、日本古来の吉凶を占う神事競馬の



現在の北大構内にあった競馬場（北海道大学付属図書館「明治・大正期の北海道」から）



明治20年ころの中島遊園地競技場（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

形式がとられていました。また、依然としてダゲヤアイビ、裸馬競走なども見られました。

その後、競馬は庶民の娯楽として次第に広まっていき、二十年（一八八七年）には、立地条件の良い中島公園に新しい競馬場が造られました。

このころ、多くの名騎手を輩出したのが屯田兵でした。特に有名だったのが山鼻屯田兵で、練兵場に馬場ときゅう舎を造って、農作業の合間になると乗馬で汗を流し、さらには、兵士二人を東京乗馬学校に入学させるほどの熱の入れようでした。

また、山鼻屯田兵は馬の品種改良にも優れており、「三太」、「春風」、「いろは」といった多くの名馬が、村民の持ち馬でした。中には、「電話」というユニークな名前の馬もいたそうです。

四十年（一九〇七年）には、桑園に競馬場が移され、明治初期の農夫たちの余興に始まり、屯田兵が駆け抜けた札幌の競馬の歴史を受け継ぐことになりました。

（平成十二年九月号・第七十一回）